
領域名：別科助産専攻

報告者：大城すぎの

教育及び実践の課題

本学では指定した抗体検査で陰性の者または予防接種が完了していない学生は実習を履修することはできないという規定がある。別科助産専攻では8月からの助産実習に備えて、HBV抗体が陰性の者に対して3月上旬までに1回目の予防接種を実施するように指示しているが、例年その規定が守れない学生がおり、その指導に時間を割いているという問題を抱えている。そこで、当科の学生に本論文に示されている調査項目と同じ内容のアンケートを実施したところ、知識があっても行動に移せていないことが明らかになったため、その対策を行う必要があると考えた。

活用した論文の概要

本調査の目的は、トルコにおける看護学生のウイルス肝炎に関する知識レベルを明らかにし、A型・B型・C型肝炎ワクチン接種率および血液体液曝露率を算出することである。トルコ7地域に所在する14看護大学の3年次と4年次の看護学生に対して自己記入式質問紙に基づく横断調査を実施した。その結果、平均知識スコアは3年次学生に比べて4年次学生で有意に高く、看護大学間で有意差が認められた。学生の28.1%に針刺し事故歴、5.4%に結膜への血液曝露歴があった。血液曝露後、患者の血液検査データをチェックした学生とクリニックを受診し血液検査を受けた学生では、HBV・HCVに関する知識の総得点が有意に高かった。

看護大学間でカリキュラムが異なることが看護学生の知識レベルに有意な影響を与えているため、大学は自身の学生のワクチン接種率を高めるためにB型肝炎ワクチン接種プログラムを実施すべきことが示唆された。

教育及び実践への活用

当科の学生のアンケートの結果から、肝炎に関する一つ一つの知識があっても予防接種という行動に移せていないのは知識の定着が不十分であるということ、行動変容モデルに当てはめると、知識があっても肝炎から肝硬変や肝癌になるという危機感がないと考えた。そのため、今年度入学オリエンテーションでB型肝炎の事例を話して学生の危機感を高めることが重要だという結論に達した。しかし、今年度は準備不足で実施できず、代わりにHBV抗体が陰性の学生に対してワクチン接種のプログラム例を提示した。さらに、①入学案内で配布する予防接種の説明用紙と予防接種票を色つきにして目につきやすいようにする、②入学書類を受理する際にB型肝炎の1回目ワクチン接種を実施しているかをチェックが出来るように、チェックリストを作成する、③保健業務委託員と健康管理担当の学生が連携し、学生自身でワクチン接種のスケジュール管理ができるように予防接種票の提出が遅れた学生へ確認をとるという3つの対策案を考えた。今年度は①と③が実施できた。その結果、3月上旬までに1回目の予防接種を実施した学生の割合は、昨年度25%だったが、本年度は83%になった。また、健康管理系の学生が個別に接種の呼びかけをすることにより、実習前にはすべての学生の接種が終了した。

参考文献

Yamazhan T, Dursoy R, Tasbakan M.I., Tokem Y, Pullukcu H, Sipahi O.R, Ulusoy S & Turkish Nursing Hepatitis Study Group(2011) : Nursing students' immunisation status and knowledge about viral hepatitis in Turkey: a multi-centre cross-sectional study, International Nursing Review 58(2),181-185
